

2007年のこと

職員同人誌『ふかし62号』編集ノート（2008年2月刊）抜粋

昨（2007）年は、西穂の40年目にあたる。『ふかし』の創刊は1965年のことであるので、10号からは、西穂関連の記事が散見される。今年度のPTA会報でも山岸編集委員長の計らいで、西穂慰霊碑の記事として取り上げてくれてもいた。今日的に事故そのものについてや慰霊碑について忘れられつつもある。そうした状況に対してこの場がふさわしいかどうか疑問なしとしないけれど、今年度の西穂関連についての報告をしておきたい。

まず、信濃毎日新聞の記者が、上高地から登る山岳部の生徒の同行取材を行い、報告記事が8月2日に掲載された。合わせて、同紙の記者で、同年代の大西健文記者の署名記事が掲載された。また、松本市民タイムス記者が、飛騨ロープウェイコースを登る同期生一行の同行取材を行った。

信濃毎日新聞の続報の中に報告されたのが、とんぼ祭に発表された漫研の三年生の瀧澤輝己作『蜻蛉ヶ丘に』である。同様の記事が少し後れて市民タイムスに載り、その記事の末尾にそっと書かれた「残部若干あり」という一言が波紋を呼んだ。その日の朝から電話がひっきりなしにかかる状態となり、作品の増刷に及んだ。作品が約200人を結びつけた。その中には、中継してくださった方を介してではあるが、私自身を西穂山荘から松本駐屯地まで運んでくれたヘリコプターの操縦士も含まれている。中継してくださった方の御父君も、事故後に長野県警に設置された同種の業務に携わることになったゆえに、つないでいただけたとのことである。その方は、校舎内の様子を知らない方の作品理解のために、作品中に出てくる場所の写真を添えて送ってくださったのである。

読後感もいくつか返送された。次のようなものもある。

「…命について考える時間を与えてもらいました。生きていることは当たり前ではないこと、すごいことだということ。…日々頑張って、生かされていることの素晴らしさをかみしめて過ごしてください。…私も自分を愛して、大切にして生きてゆきます。」

そうしたことが起こり得たのも、彼女の作品がまさに「命の歌を歌」っていたからである。私からも瀧澤輝己さんに感謝の意を表したい。

（文責 鈴岡潤一）